慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	工芸財団フィルム・アーカイブにおけるイサム・ノグチ : 工芸指導所とノグチの創作活動(記憶としての建築空間 : イサム・ノグチ/谷口吉郎/慶應義塾)
Sub Title	Isamu NOGUCHI in the Images from the Film Archive of Japan Industrial Art Foundation : Isamu NOGUCHI'S Creative Activities in the Industrial Art Institute in 1950(Architectural Space as Memory : Isamu NOGUCHI, Yoshiro TANIGUCHI, and Keio University)
Author	森, 仁史(MORI, Hitoshi)
Publisher	
Publication year	2005
Jtitle	Booklet Vol.13, (2005.) ,p.36- 51
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000013-04211346

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

工芸財団フィルム・アーカイブにおける イサム・ノグチ

—— 工芸指導所とノグチの創作活動 ——

森　仁史

はじめに

イサム・ノグチは世界旅行の途路、1950年に来日し、新築される慶應義塾大学校舎に造営される新萬來舎のために家具と庭園をデザインした。このいわば偶発的な機会に制作の場所を提供したのが工芸指導所であった。本稿はこの経過をドキュメントした工芸財団所蔵のフィルムを紹介し、その画像からノグチの創作過程を取り巻く周辺の事情を読み取って解読しようとするものである。

1　工芸財団とフィルムの来歴

1927年商工省によるデザイン指導を目的として、仙台に工芸指導所が設置された。指導所は伝統技法による製品のデザイン改良によって輸出拡大を目指す一方で、家具を中心とするモダン・デザインの実験研究に邁進した。組織としては、1940年に東京に移転し、52年には産業工芸試験所と改称された。さらに、69年に製品科学研究所として組織が大幅に変更され、80年には筑波学園都市へ再び移転し、同研究所はデザイン指導を主要な業務としなくなった。

工芸財団は1953年5月に「産業工芸試験所の業務を助長するとともに、工芸及び工業製品に関する技術の調査研究、指導を行い、工芸及び工業製品の振興に寄与する」ため設立された。事業として、研修会、セミナーの開催や調査出版のほかに、旧工芸指導所から引き継いだ蔵書や資料を保管している。また、指導所以来の多くの試作品・参考品も引継ぎ、これらは家具の博物館・武蔵野美術大学・多摩美術大学・東京造形大学に貸与された。また、一部の蔵書と試作品及び参考品は職業能力開発総合大学校に移管され現在に至っている★1。

一昨年、筆者は工芸財団事務局長のご好意により、ここに図書・雑誌以外に大量のネガフィルムが保管されているとの教示を受け、これを一覧することができた。それは工芸指導所時代から撮影されてきた膨大なコレク

ションであった。とくに1950年代のデザイン・美術活動については、それぞれの団体や作家の手がまだ記録にまで及んでいない様々なグループや実践についても丹念に撮影されていることが分かった。フィルムとともに詳細な撮影ノートも保存されていたので、これを参照することによっておおよその輪郭を掴むことができた。そこで、2004年度にポーラ美術振興財団の助成を得て、筆者・青木茂（町田市立国際版画美術館）・山田敦雄（目黒区美術館）・金子隆一（東京都写真美術館）がこの調査に取り組むことになった。

この準備過程で1950年に工芸指導所を制作の場としたイサム・ノグチの制作過程と作品展示について相当量の撮影が行われていることが分かり、その一部は東京国立近代美術館主催の「あかり展」に展示資料として提供された★2。

フィルムは昭和11年工芸指導所に入所した臼井正夫（1914-2002）の撮影になるものが殆どであった。臼井は昭和10年3月に東京高等工芸学校印刷工芸科写真部を卒業している。ここからは影山光洋、大束元、大木栄一、渡辺徹雄ら多くの報道カメラマンが巣立っている。臼井も在学中の広告写真展には「フォトグラム」（図1）を出品し、学内雑誌『テクネ』にはノイエ・ザハリヒカイト風な作品を発表しており、若者らしく時代の先鋭な表現に影響を受けて創作に取り組んでいる。

しかし、臼井が入所した当時の指導所では、昭和7年に創刊した『工芸ニュース』誌上で、試作品や実験活動を口絵写真や実験報告として積極的に発表していた。臼井の業務としての撮影はこうした試作品と指導所の活動記録が中心とならざるをえなかっただろう。しかし、国立研究機関の一部門という性格上、その活動の全貌が紹介されることはなかった。あるいは、収集した海外資料から所員の調査に必要な図版を複写して供給するこ

図1　臼井正夫
《フォトグラム》
1932年
（松戸市教育委員会）

とも行われていたと想像される。それは戦後の撮影ノートの記述から、写真研究室の日常業務は複写機が一般化する1960年代まではあまり変化がなかったことが伺われるからである。

現在残されている撮影ノートはA4判ノートに記された32冊で、フィルムサイズによって下記の通りに分類されている。原則的に1冊に1000カット収録してあり、1カットにつき番号・内容・日付が記されている。

種　類	番　号	冊数	撮影年月日
6×6	1-6520	7	1945年12月11日-1953年
EP　(乾板)	1-1322	2	1946年?-1961年6月17日
EC(カラーフィルム)	EC1-3747	4	1949年12月25日-1967年
6×9	2001-28481	9	1954年2月1日-1978年11月1日
6×9 (6×7)	EC1001-10320	1	1954年3月18日-1977年
EF(35mmフィルム)	10001-16251	6	1951年9月11日-1978年11月29日
CN (カラーネガ)	N1-3747	4	1956年12月18日-
4×5	30001-30899	2	1960年7月16日-1977年6月19日

フィルム番号から集計すれば、概算で88,000カットになる。もちろん、ここに記載されていない戦前期の撮影フィルムも引き出しのなかには確認できているので、そうした整理されずに保存されたフィルムがこのほかにもあることになる。また、撮影ノートのほかに「資料配布控簿」と記されたノートがあり、1957年4月-1973年12月まで所員に渡されたプリントの控えの記録も残っている。

また、フィルムが保存されていた引き出しはかつて写真研究室に備えられていたフィルム整理棚の引き出しそのままであることが分かったが、これは1930年代にB.タウトの示唆のもとで開始された規範原型家具の研究試作のうちの一種であった[★3]。このことも大きな発見であり、枠を復元して「ジャパニーズ・モダン展」(2004年9月より秋田市、京都市、丸亀市、松戸市で巡回展示) に展示出品された[★4]。

現在、撮影ノートとフィルムとの照合及びデジタルスキャニング作業を進めているところである。これまで殆ど利用されてこなかった貴重な資産を美術史、デザイン史の調査研究に活用できるよう整理し、今後のその有効利用と学術的評価への道を準備したいと考えている。

2　工芸指導所とイサム・ノグチ

イサム・ノグチは1948年には在ニューヨークの石垣綾子によって『美術手帖』誌上に、詳細で好意的な作家紹介が行われており、「高度のシンボリックをかいげながら、生々とした感情を伝え」る作家として称揚され、彫刻作品とともにハーマン・ミラー社が製品化したテーブルも紹介されていた[★5]。

1950年5月2日ノグチはバリ島から羽田に到着した。閑暇（リクリエーション）をテーマとした調査旅行の途上であった。だから、この直後の6日に谷口吉郎から新萬來舎（教職員ホール）のデザインを依頼されても、制作への用意が全くなかった。このための家具と彫刻制作の場所と材料を産業工芸試験所が提供した。これはノグチ歓迎会を開いた新制作協会の猪熊弦一郎が試験所研究部第一課長だった剣持勇に依頼したことによっていた。5月9日にノグチは「芸術と集団社会」と題して有楽町毎日ホールで講演し、この翻訳が『美術手帖』6月号に掲載された。また、指導所は6月20日に工芸協会と共催して、国立博物館で「モダンライフと室内の傾向」と題してノグチの講演会を開いた★6。これらはファイン・アート、デザインの両分野でいかにノグチへ熱い視線が注がれていたかを物語っている。

剣持は6月24日に東大の丹下健三研究室でノグチに会っていて★7、講演で社会的行為としての創造を説いた同じ名前の彫刻家に親しみを感じていた。

もちろん、この剣持個人の強い関心がきっかけであったが、それ以外に指導所にとってはノグチが抽象彫刻家でありながら、ハーマン・ミラー社のG.ネルソンからデザイナーとして製品企画を委嘱もされ、いくつかのインテリア作品がアメリカで高く評価されていたことに関心があったはずだ。芳武茂介はノグチの多様な表現を「用途への順応は必然的に抽象的形態をとるであろう。彼の抽象主義は、家具を、舞台衣装を、舞台装置を生むべくして生んだものである。…デザインされる彫刻に、環境への適応、新しい工業技術との組立ちによって常に新しい造形的なイデイオムを造り出している」★8と捉えている。しかも、日本が戦後になって眼を開かれつつあったアメリカデザイン界で注目を集める程の実績を残していることが重要だった。戦前期の日本にとってはバウハウスを基軸とする機能主義デザインを範とすることが主要な課題であったが、敗戦によって新たな指標を求めつつあった時期に、まさにアメリカデザインの活況の渦中にある人物がやってきたのである。進駐軍家族住宅（デペンデント・ハウス）の住宅什器の製作でモダンデザイン家具の量産とそのデザイン手法を初めて実地に体験した指導所にとってまさにうってつけの人材だった。従って、ノグチの制作はただ個人的好意というよりは指導所としてのアメリカデザイン伝習であったために受け入れるべきだと判断されたのだろう。だからこそ、ノグチの制作は指導所の試作研究と位置づけることができたのだ。

3　撮影内容と分析

ネガフィルムは1枚ごとに切断してトレーシングペーパーの保護袋に入れ、それを10枚で一綴りとした手製のバインダーに入れられ、このサイズにほぼ過不足のない深さの引き出しに収められていた。フィルムにはこの整理の時点で一連番号が記入され、撮影ノートは番号毎に1行づつ記入されている。これらの一連の作業は撮影後に行われたと考えられ、不首尾の

カットは取り除かれたであろうし、また厳密に撮影順に番号が振られているわけではない。一連のショットの番号が飛んでしまっている例も散見されるからである。プロのカメラマンの撮影であるならば、残されたフィルム以上に多くのカット数の撮影が行われたと考えるのが自然であろう。

こうした撮影内容から、ノグチの活動を以下に順を追ってみよう。ノグチが7月28日に猪熊夫妻とグリーンバーグ夫人に伴われて初めて工芸指導所を訪れた時から、臼井は記録を開始している。撮影月日と内容及びカット数は次の通りである。工芸指導所として一つのプロジェクトに対する撮影としては、それほど大掛かりなものではない。しかし、撮影内容から充分その進行状況を具体的に窺い知ることができるほどには充実した記録となっている。(詳細は別掲目録を参照)

撮影年月日　内　容(カット数)〔撮影場所〕

①7月28日　ノグチと指導所員の歓談(14)

工芸指導所の応接室で指導所員とノグチが歓談している。他の記録で知られているように、前日雨に降られて衣服を濡らしたノグチは浴衣に下駄履きである。猪熊夫人の隣に腰をおろし、テーブルを挟んだ対面に剣持が座っている。ノグチに語りかけているのは専ら剣持であり、なかでもノグチが天狗や狐の張子面を剣持から提示され、興味深げに眺め語っている場面はその対話の内容と雰囲気が想像できるようである(図2)。これについて資料を用意したらしい剣持のファイルをノグチが熱心に覗き込んでいる場面もある。また、ここで使用されているテーブルや竹編安楽椅子、マガジンラックなどはいずれも工芸指導所がこれまでに製作してきた試作品である。

②8月2日　ノグチの《若い人》制作風景(20)〔第一工作室〕

ノグチは8月1日に指導所で制作を開始し、記録どおりストライプのTシャツに作業ズボンといういでたちで、すでに裁断の終わった《若い人》の部材を一人で組み立てているのが写されている。なかに、助手を務めた広井力らしい人物のほかに2名の作業員に、図面を前にして裁断面を見せて指示をしている場面が撮影されている(図3)。これに続く場面は番号が飛んでいる。この《若い人》は2分の1模型であり、組み立てたあと再度解体して、完成後の色に合わせて鉄錆色に着色された。

③8月10日　《無》及びその制作状況(4)

猪熊の回想によれば[★9]、展覧会が始まる1週間くらい前にノグチは「燈篭を作りたいです」と言い出した。ノグチは猪熊に石屋を紹介して欲しいと頼んだが、石の制作では展覧会開幕に間に合わないと答え、ノグチも一旦は諦めた。しかし、ノグチは諦めきれずにデッサンを続け、2日間でこの作品を仕上げた。1.5インチの合板に骨格に木摺麻糸を巻きつけ石膏を直付けした。130キログラムの石膏が使われたという(図4)。これが撮影された10日には、ノグチは周囲に眼もくれずまだ表面の修正をしている情況が写されており、従って、制作は8日から始まったということになる。

図2　ノグチと指導所員の歓談
1950年7月28日〔2379〕
（工芸財団）

図3　《若い人》制作風景
1950年8月2日〔2393〕
（工芸財団）

図4　《無》の石膏原型
1950年8月10日〔2430〕
（工芸財団）

〔　〕内は別掲目録番号

④8月16日　ノグチの制作風景（9）

②と同じ第一工作室で別な日に撮影された。ノグチは鑿を使って部材を削っている。これらは《平和塔》の部材のようである。このように多くがノグチ一人の作業であったことは間違いない。

⑤8月16日　テラコッタ作品4点（11）

すでに瀬戸で制作された作品を床置きに黒の布をバックにして撮影してある。展覧会用に改めて撮影したのであろう。

⑥8月16日　ノグチによる作品組み立て（5）

これも第一工作室で撮影されたもので、初めは《ヒロイズムの後に残るもの》で（図5）、次いで《平和塔》の準備が記録されている。二つの作品の組み立てが殆ど平行して進んでいる様子が伺えて興味深い。しかし、今日では防災上考えにくいのだが、ノグチは作業中も殆どいつもくわえ煙草である。2週間にわたるノグチの制作の最終の時期の撮影と思われる。

⑦8月16日　ノグチの旋盤作業（5）

《平和の塔》組み立て後に、旋盤をつかって作業している様子が記録されている。これも同じ部屋のようであり、後ろに仕上がっていない《ヒロイズムの後に残るもの》が置かれているのが見える。《無》の制作でたいへんな体力の消耗を強いられたはずなのに、その後の1週間の制作にもいささかのペースダウンも見られないようである。こうした制作をノグチ「デッドライン・ワーク」と呼び、このときの作家としてのすさまじい集中振りは周囲を驚かせた。

⑧8月21日　ノグチ展の設営及び展示記録（89）〔三越〕

会場で黒いパネルにノグチが父野口米次郎の詩を書く場面から始まって（図6）、搬出風景が続いている。もっと後のフィルム番号にこの詩を描く場面が再び登場するので、ここからも撮影順に番号をふって整理しているのではないことが分かる。最も大きな作品《無》は新聞配送トラックを使って搬送されたことが記録されている。

展覧会は毎日新聞社主催で8月18日から30日まで、日本橋三越で開催されたが、ノートには21日と記されているものの、ノグチが父野口米次郎の詩を書いている場面を毎日新聞であろうかムービーフィルムカメラマンが撮影しているし、他の取材陣の姿も見えるので撮影が会期中とは考えられない。また、ノグチの服装も⑨の記念撮影とは全く異なっている。

この展示計画は谷口吉郎が担当し、展示にはノグチ自身のほかに猪熊や工芸指導所スタッフが協力した（図7, 8）★10。会場とポートレート撮影を土門拳も行っており、これらは『みづゑ』に掲載された。

展示された《竹製安楽椅子》は制作過程の写真がない。剣持が提示した笊を座とするアイデアを元にノグチがデザインスケッチを作り、それを剣持が原寸詳細図と模型にした。さらに修正が加えられた後、試作は鉄フレームを指導所金工課が竹編みは井上春光が担当した。椅子は展覧会搬入の日に完成したらしく、ドレスアップして指導所に現れたノグチは腰をかけ

図5　《平和塔》作品組立風景
1950年8月16日〔2454〕
（工芸財団）

図6　展覧会場における壁画制作風景
1950年8月21日〔2546〕
（工芸財団）

図7　三越イサム・ノグチ作品展会場
1950年8月21日〔2497〕
（工芸財団）

図8　三越イサム・ノグチ作品展会場
1950年8月21日〔2534〕
（工芸財団）

図9　《竹製安楽椅子》と関係者の記念撮影
1950年8月21日〔2558〕
（工芸財団）

図10　ノグチ離日　羽田空港にて
1950年9月5日〔2576〕
（工芸財団）

て座り心地を確認して「ノット・バッド」と言ったという。この場面はノグチ自身と猪熊によって撮影され、その一枚はノグチ財団所蔵フィルムのうちにある。あまりに瀬戸際の制作日程だったため、臼井には撮影の機会がなかったのであろうか。

⑨8月21日　ノグチ作品複写、記念撮影（8）

三越の会場には、来日時に制作した以外の作品パネルが展示されたので、会場でこれらを複写している。《テーブル》、《月の旅》などである。《竹製椅子》に座ったノグチや関係者の記念撮影が続いている。この記念撮影が8月21日に行われたようで、そのうちの一枚には猪熊夫人が写っている（図9）。

⑩9月5日　ノグチ離日（20）

ここでも実際の撮影順と異なり、ノグチの搭乗のショットの後に、羽田空港での未だのどかな見送り風景が次いで並んでいる（図10）。野口家の血縁者、谷口吉郎、猪熊弦一郎、外山卯三郎ら美術関係者のほか、工芸指導所からは剣持勇、芳武茂介が見送っている。

4　余波

ノグチ離日前日の9月4日午後11時過ぎに、剣持は出発準備中のノグチを訪ねた。臼井が撮影した製作中のノグチや作品の写真数十枚を手渡すためであった。その数量からすれば、恐らく上記の写真の殆どだろうと思われる。これを見て大喜びしたノグチは急遽これらは自身が持ち帰ることにした。それからノグチはお礼のための色紙を何枚か書いた。臼井にあてた色紙（図11）には毛筆で「For Usuisan from Isamu Noguchi, Sept '50」と献辞が書かれ、1月後に、ノグチは約束どおり《竹製安楽椅子》（図12）の写真をデザイナーのジョージ・ネルソンに見せると、ネルソンはとても喜び、

図11　イサム・ノグチ
《臼井正夫にあてた色紙》
（個人蔵）

ハーマン・ミラー社のスタッフにも見せたことを剣持に知らせてきた。指導所は急遽サンプルオーダーに応えることとなった★11。

剣持はノグチの最初の来日時にその意味をこう表現している。

1934年にブルーノ・タウト。

1940年にシャルロット・ペリアン。

そして1950年の今年にイサム・ノグチを吾々は迎えた★12。

若くエネルギッシュで、新しい時代を切り拓こうと切磋していたノグチは戦後復興に向けてスタートダッシュの契機を求めていた日本の作家に重要な鍵を与えることになった。特にノグチが「――東洋は西洋の文明を学びましょう。西洋は東洋の文化を学びましょう。そしてfreedomの世界でこそ、お互いの国々は自然とrelationshipを生んでいくのです」と語ったことによって、剣持は「ジャパニーズ・モダン」の実行に踏み出すことに自信を深めることができたのだった。その意味で竹製椅子におけるノグチとの協労作業は実践的な糸口として重要なプロセスだったのだ。このなかで、工芸指導所が戦前から手掛けてきた編組という伝統技法の研究がようやくモダン・デザインの地平に着地でき、その行く末を展望できた瞬間だったろう。また、ジャパニーズ・モダンに対する論難や伝統の再発見の方向についても建築・美術分野で論争が巻き起こり日本の1950年代にとってノグチの再来は極めて大きな意味があった。それはノグチのパトスとそれに触発された人々の動きが巻き起こしたものであり、工芸財団フィルムはこの熱気を如実に伝えてはいまいか。

記録はその後も続き、1952年に神奈川県立美術館においてイサム・ノグチ展が開催されたときには、会場風景も細かく記録されている。とくに、出品目録に記載されなかった照明器具《あかり》シリーズが彫刻作品に等しい分量で撮影されている。また、1950年に展示されたノグチ作品は展覧会修了後は指導所で保管されたらしく、少なくとも1952年11月15日の産

図12　イサム・ノグチ
《竹製安楽椅子》
1950年8月21日
〔2523〕
（工芸財団）

図13　産業工芸試験所開設25周年式典
1952年11月15日
（工芸財団）

業工芸試験所開設25周年式典には《コーヒーテーブル》、《スツール》、《壺、石膏による制作》が展示された（図13）。臼井や研究所のノグチ作品へのいつくしみが感じられる。また、これらが工芸財団に伝えられたこと自体がこうした事業への関係者の熱意の賜物のようだ。

註

☆1――図書及び雑誌については次を参照。『工芸技術特別図書目録』職業訓練大学校図書館、昭和55年。

☆2――東京国立近代美術館、金子賢治、木田拓也、北村仁美編『あかり―イサム・ノグチが作った光の彫刻』　東京国立近代美術館、2003年、10-11頁。

☆3――『工芸ニュース』第7巻第5号、10頁。

☆4――『ジャパニーズ・モダン―剣持勇とその世界―』　松戸市文化振興財団、2004年、50頁。

☆5――『美術手帖』第8号、1948年8月、20頁。

☆6――『工芸ニュース』第18巻第10号、18-19頁。

☆7――剣持勇「工芸指導〔所〕におけるイサム・ノグチ」、『工芸ニュース』第18巻第10号。以下、指導所での活動については本論文に拠る。

☆8――芳武茂介「アートとしての工芸」『工芸ニュース』第18巻第10号、24頁。

☆9――猪熊弦一郎「無」、『みづゑ』第540号。

☆10――『工芸ニュース』第18巻第10号、『芸術新潮』第1巻第10号、口絵。

☆11――剣持勇「その後のイサム・ノグチ」、『工芸ニュース』第18巻第11号、27頁。

☆12――☆7、23頁。

（もり　ひとし・松戸市教育委員会学芸員／近代デザイン史）

イサム・ノグチ関係画像目録（工芸財団フィルム・アーカイブより）

No.	西暦	月	日	内容	撮影場所
2375	1950	7	28	イサム・ノグチ、猪熊弦一郎来所（剣持勇ら工芸指導所員と）	工芸指導所
2376	1950	7	28	イサム・ノグチ、猪熊弦一郎来所（剣持勇ら工芸指導所員と）	工芸指導所
2377	1950	7	28	イサム・ノグチ、猪熊弦一郎来所（剣持勇ら工芸指導所員と）	工芸指導所
2378	1950	7	28	イサム・ノグチ、猪熊弦一郎来所（剣持勇ら工芸指導所員と）	工芸指導所
2379	1950	7	28	イサム・ノグチ、猪熊弦一郎来所（剣持勇ら工芸指導所員と）	工芸指導所
2380	1950	7	28	イサム・ノグチ、猪熊弦一郎来所（剣持勇ら工芸指導所員と）	工芸指導所
2381	1950	7	28	イサム・ノグチ、猪熊弦一郎来所（剣持勇ら工芸指導所員と）	工芸指導所
2382	1950	7	28	イサム・ノグチ、猪熊弦一郎来所（剣持勇ら工芸指導所員と）	工芸指導所
2383	1950	7	28	イサム・ノグチ、猪熊弦一郎来所（剣持勇ら工芸指導所員と）	工芸指導所
2384	1950	7	28	イサム・ノグチ、猪熊弦一郎来所（剣持勇ら工芸指導所員と）	工芸指導所
2385	1950	7	28	イサム・ノグチ、猪熊弦一郎来所（剣持勇ら工芸指導所員と）	工芸指導所
2386	1950	7	28	イサム・ノグチ、猪熊弦一郎来所（剣持勇ら工芸指導所員と）	工芸指導所
2387	1950	7	28	イサム・ノグチ、猪熊弦一郎来所（剣持勇ら工芸指導所員と）	工芸指導所
2388	1950	7	28	イサム・ノグチ、猪熊弦一郎来所（剣持勇ら工芸指導所員と）	工芸指導所
2389	1950	8	2	イサム・ノグチ作業《若い人》制作状況	工芸指導所第一工作室
2390	1950	8	2	イサム・ノグチ作業《若い人》制作状況	工芸指導所第一工作室
2391	1950	8	2	イサム・ノグチ作業《若い人》制作状況	工芸指導所第一工作室
2392	1950	8	2	イサム・ノグチ作業《若い人》制作状況	工芸指導所第一工作室
2393	1950	8	2	イサム・ノグチ作業《若い人》制作状況	工芸指導所第一工作室
2394	1950	8	2	イサム・ノグチ作業《若い人》制作状況	工芸指導所第一工作室
2395	1950	8	2	イサム・ノグチ作業《若い人》制作状況	工芸指導所第一工作室
2396	1950	8	2	イサム・ノグチ作業《若い人》制作状況	工芸指導所第一工作室
2397	1950	8	2	イサム・ノグチ作業《若い人》制作状況	工芸指導所第一工作室
2398	1950	8	2	イサム・ノグチ作業《若い人》制作状況	工芸指導所第一工作室
2399	1950	8	2	イサム・ノグチ作業《若い人》制作状況	工芸指導所第一工作室
2400	1950	8	2	イサム・ノグチ作業《若い人》制作状況	工芸指導所第一工作室
2401	1950	8	2	イサム・ノグチ作業《若い人》制作状況	工芸指導所第一工作室
2402	1950	8	2	イサム・ノグチ作業《若い人》制作状況	工芸指導所第一工作室
2403	1950	8	2	イサム・ノグチ作業《若い人》制作状況	工芸指導所第一工作室
2404	1950	8	2	イサム・ノグチ作業《若い人》制作状況	工芸指導所第一工作室
2405	1950	8	2	イサム・ノグチ作業《若い人》制作状況	工芸指導所第一工作室
2406	1950	8	2	指示するノグチと助手	工芸指導所第一工作室
2407	1950	8	2	作業中のノグチ	工芸指導所第一工作室
2425	1950	8	10	イサム・ノグチ彫刻《無》	工芸指導所
2426	1950	8	10	イサム・ノグチ彫刻《無》	工芸指導所

2430	1950	8	10	《無》制作中のイサム・ノグチと猪熊弦一郎夫妻、剣持勇ら所員	工芸指導所
2431	1950	8	10	《無》制作中のイサム・ノグチと猪熊弦一郎、剣持勇ら所員	工芸指導所
2432	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況	工芸指導所
2433	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況	工芸指導所
2434	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況	工芸指導所
2435	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況	工芸指導所
2436	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況	工芸指導所
2437	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況	工芸指導所
2438	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況	工芸指導所
2439	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況	工芸指導所
2440	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況	工芸指導所
2441	1950	8	16	イサム・ノグチ、テラコッタ作品《恋人》	工芸指導所
2442	1950	8	16	イサム・ノグチ、テラコッタ作品《恋人》	工芸指導所
2443	1950	8	16	イサム・ノグチ、テラコッタ作品《恋人》	工芸指導所
2444	1950	8	16	イサム・ノグチ、テラコッタ作品《恋人》	工芸指導所
2445	1950	8	16	イサム・ノグチ、テラコッタ作品《鐘の子》	工芸指導所
2446	1950	8	16	イサム・ノグチ、テラコッタ作品《鐘の子》	工芸指導所
2447	1950	8	16	イサム・ノグチ、テラコッタ作品《暑い日》	工芸指導所
2448	1950	8	16	イサム・ノグチ、テラコッタ作品《暑い日》	工芸指導所
2449	1950	8	16	イサム・ノグチ、テラコッタ作品《1950年の子供》	工芸指導所
2450	1950	8	16	イサム・ノグチ、テラコッタ作品《1950年の子供》	工芸指導所
2451	1950	8	16	イサム・ノグチ、テラコッタ作品《1950年の子供》	工芸指導所
2452	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況《平和塔》	工芸指導所
2453	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況《平和塔》	工芸指導所
2454	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況《平和塔》	工芸指導所
2455	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況《平和塔》	工芸指導所
2456	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況《平和塔》	工芸指導所
2457	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況《平和塔》	工芸指導所
2458	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況《平和塔》	工芸指導所
2459	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況《平和塔》	工芸指導所
2460	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況《平和塔》	工芸指導所
2461	1950	8	16	イサム・ノグチ制作状況《平和塔》	工芸指導所
2462	1950	8	21	イサム・ノグチと谷川教授	三越
2463	1950	8	21	イサム・ノグチと谷川教授	三越
2491	1950	8	21	イサム・ノグチ展(会場、作品、萬来舎)	三越
2493	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（彫刻、入口壁画）	三越
2494	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《手》）	三越
2495	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（石膏原型）	三越
2496	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《休息用長椅子》）	三越
2497	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《ベルタワー》と壁画）	三越
2498	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《ベルタワー》と壁画）	三越
2499	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《手》）	三越
2500	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《手》）	三越
2501	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《手》）	三越
2502	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《若い人》）	三越
2503	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《若い人》）	三越
2504	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《スツール》、《コーヒーテーブル》、編組椅子、壁画背景）	三越
2505	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《スツール》、《コーヒーテーブル》、編組椅子、壁画背景）	三越

2506	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（萬来舎模型）	三越
2507	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（萬来舎模型）	三越
2508	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（萬来舎模型）	三越
2509	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（萬来舎模型）	三越
2510	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（萬来舎模型）	三越
2511	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（萬来舎模型）	三越
2512	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《ベルタワー》）	三越
2513	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《ベルタワー》）	三越
2514	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《原爆記念塔》）	三越
2515	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《原爆記念塔》）	三越
2516	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《原爆記念塔》）	三越
2517	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（壁画）	三越
2518	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（壁画と《コーヒーテーブル》）	三越
2519	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（壁画と《コーヒーテーブル》、《スツール》）	三越
2520	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（壁画と《コーヒーテーブル》）	三越
2521	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（休息用椅子(編組＋鉄骨)）	三越
2522	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（休息用椅子(編組＋鉄骨)）	三越
2523	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（休息用椅子(編組＋鉄骨)）	三越
2524	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（休息用椅子(編組＋鉄骨)）	三越
2525	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《スツール》）	三越
2526	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《スツール》）	三越
2527	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（石膏花瓶）	三越
2528	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（石膏花瓶）	三越
2529	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（石膏花瓶）	三越
2530	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（石膏花瓶）	三越
2531	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《二つの板の愛》）	三越
2532	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《骨と皮》）	三越
2533	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（瀬戸にて制作の素焼き彫刻）	三越
2534	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（瀬戸にて制作の石膏壺）	三越
2535	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《巡査》	三越
2536	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《少女》《胸》）	三越
2537	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《ツネコサン》）	三越
2538	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《ツネコサン》）	三越
2539	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（瀬戸にて制作の素焼き壺）	三越
2540	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（《金太郎》）	三越
2541	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（入口のための彫刻）	三越
2542	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（壁架）	三越
2543	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（壁架）	三越
2544	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（壁架）	三越
2545	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（壁架）	三越
2546	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（ノグチ揮毫）	三越

2547	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（ノグチ揮毫）	三越
2548	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（ノグチ揮毫）	三越
2549	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（ノグチ揮毫の図）	三越
2550	1950	8	21	イサム・ノグチ展会場風景（ノグチ揮毫の図）	三越
2551	1950	8	21	展示写真複写（ティーテーブル）	三越
2552	1950	8	21	展示写真複写（夜の園）	三越
2553	1950	8	21	展示写真複写（テーブルと小椅子）	三越
2554	1950	8	21	展示写真複写（テーブル）	三越
2555	1950	8	21	展示写真複写（アラモアナ公園遊具）	三越
2556	1950	8	21	会場での記念写真（ノグチと女性）	三越
2557	1950	8	21	会場での記念写真（編スツールに座るノグチ）	三越
2558	1950	8	21	会場での記念写真（猪熊夫人）	三越
2559	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（カメラを構えるノグチ）	羽田空港
2560	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（ノグチ兄弟）	羽田空港
2561	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（ノグチ兄弟）	羽田空港
2562	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（イサム・ノグチと外山卯三郎）	羽田空港
2563	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（イサム・ノグチと外山卯三郎）	羽田空港
2564	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（旅客機とタラップ）	羽田空港
2565	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（飛行機とタラップ）	羽田空港
2566	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（手を振るイサム・ノグチ）	羽田空港
2567	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（手を振るイサム・ノグチ）	羽田空港
2568	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（ノグチ兄弟ら）	羽田空港
2569	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（ノグチといとこ母子）	羽田空港
2570	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（見送る人々とノグチ）	羽田空港
2571	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（見送る人々とノグチ）	羽田空港
2572	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（見送る人々とノグチ）	羽田空港
2573	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（見送る人々とノグチ）	羽田空港
2574	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（見送る人々とノグチ）	羽田空港
2575	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（猪熊夫人その他）	羽田空港
2576	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（見送る人々とノグチ）	羽田空港
2577	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（ノグチ兄弟）	羽田空港
2578	1950	9	5	イサム・ノグチ離日（剣持勇、芳武茂介）	羽田空港
4740	1952	10	15	イサム・ノグチ展（《こけし》）	神奈川県立近代美術館
4741	1952	10	15	イサム・ノグチ展会場風景（《垣根》、《ムカデ垣》、《祝典（休日）》）	神奈川県立近代美術館
4742	1952	10	15	イサム・ノグチ展会場風景	神奈川県立近代美術館
4743	1952	10	15	イサム・ノグチ展会場風景（《垣根》）	神奈川県立近代美術館
4744	1952	10	15	イサム・ノグチ展会場風景	神奈川県立近代美術館
4745	1952	10	15	イサム・ノグチ展会場風景（あかり《33S》）	神奈川県立近代美術館
4746	1952	10	15	イサム・ノグチ展会場風景（あかり）	神奈川県立近代美術館
4747	1952	10	15	イサム・ノグチ展会場風景（あかり）	神奈川県立近代美術館
4748	1952	10	15	イサム・ノグチ展会場風景（あかり）	神奈川県立近代美術館
4749	1952	10	15	イサム・ノグチ展会場風景（あかり）	神奈川県立近代美術館
4750	1952	10	15	イサム・ノグチ展会場風景（あかり《10A》他）	神奈川県立近代美術館
4751	1952	10	15	イサム・ノグチ展会場風景（あかり）	神奈川県立近代美術館
4752	1952	10	15	イサム・ノグチ展会場風景（あかり）	神奈川県立近代美術館
4753	1952	10	15	イサム・ノグチ展会場風景（あかり）	神奈川県立近代美術館
10299～				ノグチ石膏作業（《手》制作）	

〔注〕本目録は原則として臼井の記述に従ったが、作品名等は他の資料によって補った。